

太宰府の文化財

407

宝満隠しと稲子地蔵

国分3丁目の県道112号線の国分寺信号近くにひっそりと祠ほとこがあります。現在祠の周囲は宅地造成されていますが、昨年まで小さな丘がありました。この丘は、「宝満隠し」と言われていました。

宝満隠しについては、『太宰府旧蹟全図北図』（1806年）や『筑前国続風土記拾遺』（江戸後期）にも記録され、『筑前国続風土記拾遺』には「往還の東いささか田を隔て小高い丘あり。俗に宝満かくしといふ。

此丘の下の道をゆく程は宝満は高山なれとも稍此小丘にかくれて見えず。依て名づく。」と記されています。さらに地元では次のような

言い伝えが残されています。

「昔、二人の武士が水城のあたりに、宝満山を隠すような山があるかないかで言い争いました。その山がある」と言い張った武士が相手をここまで連れてくると、やはり宝満山は小さな丘にさえぎられて見えなくなりました。しかし、そんな山はない」と言った相手は、宝満山を隠すほどの高い山のことを言っていたので納得せず、またしても口論となり、ついには刀を抜いての果たし合いの末、二人とも命を落としてしまいました。土地の人たちは、二人を葬った場所に石碑を建て、そこを「宝満隠し」と呼ぶようになりました。」

『太宰府市史 民俗資料編』

また、宝満隠しの傍らにある祠の中には花こう岩の岩が祀まつられています。これは「稲子地蔵」と言われています。その由来は、「苜蓿かつかの関守せきもりであった加藤左衛門尉繁かとうさゑもんゑい かつむらた氏の身代わりになって敵刃に倒れた侍女の稲子をお祀りしたもの」といわれ、『筑前国続風土記拾遺』にもそのように記されています。しかし、地元では



稲子地蔵

別の言い伝えも残されています。

「むかし、稲子という女性が、宝満山の山伏に恋をしました。しかし山伏の冷たい態度に悲観した稲子は、遂に身を投げて死にました。里の人々は、稲子の心情を哀れに思い、彼女の亡骸なきがらをせめて宝満山の見えない所、つまり宝満隠しに葬り、お祀りしました。」

『太宰府市史 民俗資料編』

現在「宝満隠し」は削られ、宝満山を隠すような丘は残っていませんが、昔話は残された稲子地蔵と共に後世に残ることでしよう。

文化財課 宮崎 亮一



「宝満隠し」がなくなり、遠くに見える宝満山。手前は稲子地蔵。



ありし日の宝満隠しの丘 (2009年)